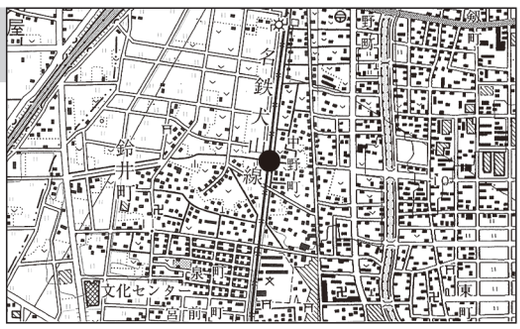
御山寺（ごさんじ）遺跡

所　在　地　岩倉市中野町
（北緯35度17分18秒 東経136度52分13秒）
調査理由　緊急地方道路整備事業3･3･8号一宮春日井線
調査期間　平成17年4月～9月
調査面積　3,890㎡
担　当　者　石黒立人・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「一宮・小牧」）

調査の経過　発掘調査は、県道一宮春日井線街路新設改良工事の事前調査として、愛知県建設部都市整備課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。平成16年度（調査面積2580㎡）に引き続き2年目の調査である。前年度は名鉄犬山線の東西両隣接地を調査区としたが（04A・B区）、今年度はそこからさらに東西へと調査エリアを拡大した。すなわち線路西側で05A・B区、東側で05C～E区である。

立地と環境　当遺跡は犬山扇状地末端に位置し、04A・05B区ではその礫層が地表面下約20㎝で露出する箇所がある。遺跡および付近の標高は11m前後であるが、これは昭和40年代の区画整理までに微高地の高所を削り低地へ土砂を移動させた結果であり、特に礫層露出部分ではかなりの遺構が滅失していた。

この礫層は、05A区での調査成果および明治時代地籍図の解析から、幅約50m規模の旧河道の東岸にあたることが判明し、礫層を形成した河道はかつて木曽川から分かれていた流路の一つであったことが想定された。ここでは昨年度に引き続き旧河道を「旧五条川」と仮称する。05A区と05B区の間には幅1.8mの用水路が現在も機能しているが、この用水路は上流で現在の五条川から分岐する。そのルートは地籍図から復元される「旧五条川」の東岸からやや高所を南下していることになる。

調査の概要　昨年度と同様に戦国時代の大溝、古墳時代中期と平安時代の竪穴建物で構成される集落が確認された他、線路の東側で埋没した谷地形を2か所で検出した（図1）。以下時代別に概観する。

弥生時代末期　05Ea・Eb区では現地表面から約2.5m下る小さな谷地形を調査区東端と西端でそれぞれ確認した。いずれも南方向に開析するもので、幅も10mに満たない規模である。谷地形の形成時期は不明であるが、平安時代には若干の窪地になっており、該期の集落が展開されるに及んで整地され平坦地化する。西側の谷底からは廻間Ⅰ式期の土器が大量に廃棄状態で出土した。器種は高杯、壺、甕で概ね使用されたものである。一方東側の谷では傾斜面に同じく廃棄状態の土器群が確認された。東側の谷では赤彩された小型壺が出土し、調査中には豊富な湧水も認められたことから、湧水点祭祀が行われた可能性も考えられる。

古墳時代前～中期の集落　線路東側では古墳時代土器の出土は寡少であったが、西側05B区では松河戸様式の土師器を中心とする土器の出土があった。特に松河戸Ⅰ式の土師器甕・高杯が目立つ。竪穴建物は重複状態にある30棟近くが検出されたが、残存状況が良かったのは数棟にすぎない。ほとんどは確認面から深さ5㎝程度で床面に達しており、出土遺物も少なかった。唯一まとまった出土遺物のあったSB1029は重複関係で最古段階と判断され、床面までの深さは約20㎝あった。土器群は覆土中から台付甕、壺、高杯が廃棄状態で出土した。

遺構検出作業中に竪穴建物跡の確認面にて滑石製双孔円板1点が出土した（図2）。そこ

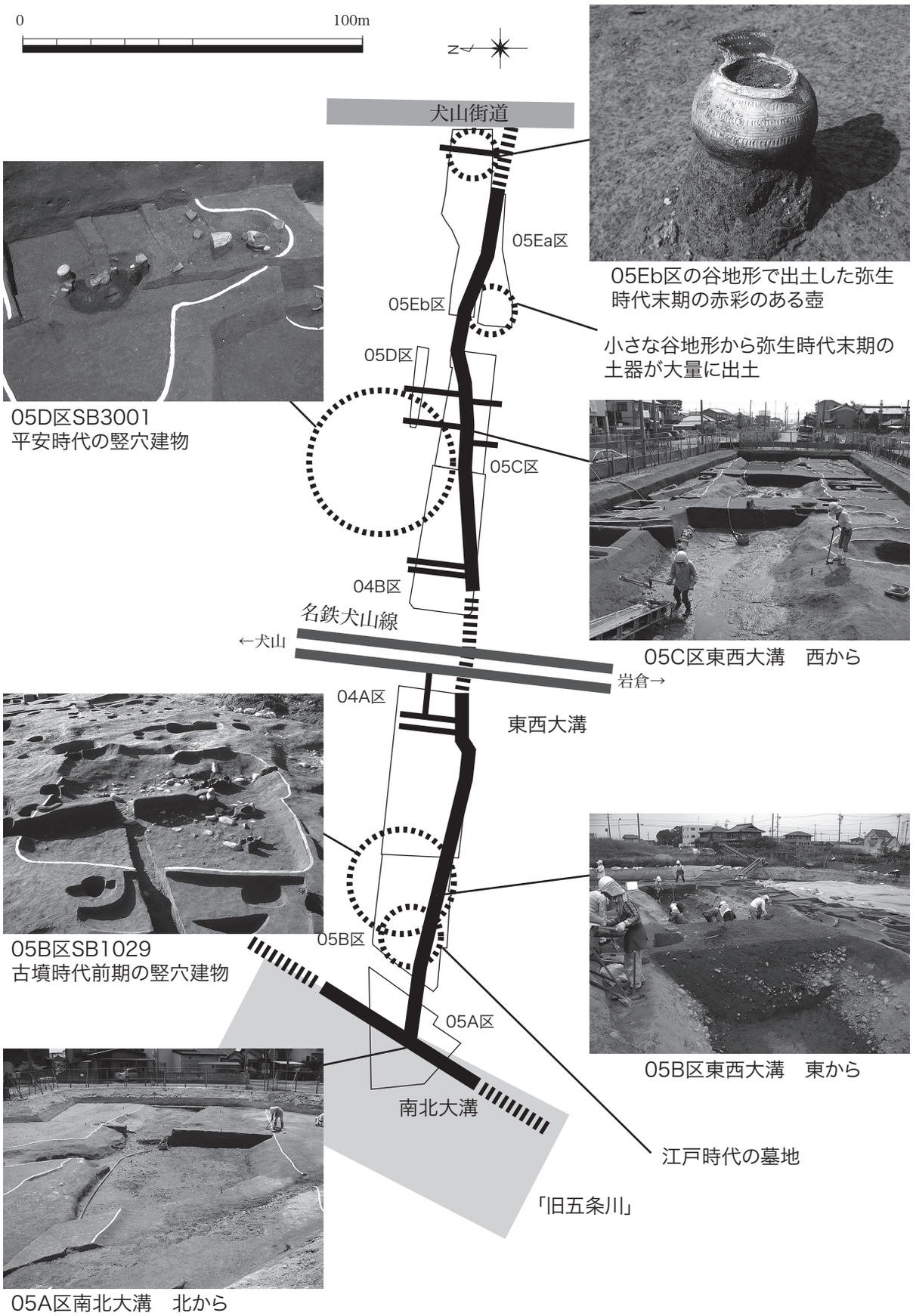

0
100m
N
犬山街道
05Ea区
05Eb区
05D区
05C区
04B区
名鉄犬山線
←犬山
岩倉→
04A区
東西大溝
05B区
05A区
南北大溝
「旧五条川」
江戸時代の墓地
05Eb区の谷地形で出土した弥生時代末期の赤彩のある壺
小さな谷地形から弥生時代末期の土器が大量に出土
05D区SB3001
平安時代の竪穴建物
05C区東西大溝　西から
05B区SB1029
古墳時代前期の竪穴建物
05B区東西大溝　東から
05A区南北大溝　北から

図１　遺跡概略図

で竪穴建物の覆土は全て事務所に持ち帰り、水洗選別作業を実施した。その結果、滑石製の臼玉2点とガラス製臼玉1点が確認された。また検出段階で出土したものに両端に穿孔のある棒状土錘1点がある（図3）。瀬戸内海から紀伊半島沿岸の弥生～古墳時代に展開するタイプで、伊勢湾岸地域では愛知県一宮市大毛池田遺跡や岐阜県可児市など木曽川流域に若干みられる程度である。ただこれ以外の漁労に関わる遺物はなかった。なお、猿投窯初期段階の須恵器は若干数にとどまった。竪穴建物の覆土からは出土せず、05A区などで器台などが出土した。

平安時代の集落

線路東側の05C～E区では、奈良～平安時代の遺物が中世・戦国時代の遺物に混在して多数出土した。しかし確認された古代の遺構は平安時代中期の竪穴建物3棟にとどまった。竪穴建物は、昨年度の調査区（04B区）から東方の05C・D区にあり、05C区東端付近は平安時代でもなお谷地形が窪地状に残っていたとみられること、04B・05D区の北側の畑地でも古代の土器が採集されることから、当該期集落の南端付近を確認したと考えられる。古代でも前半期にあたる7～8世紀の集落遺構については全くといっていいほど確認できなかったが、平安時代集落の形成以前に大規模な整地がなされて大部分が滅失した可能性も考えておきたい。05C区東端付近の谷地形では一部を埋めて整地したとみられる土層があり、そこから古代の須恵器が出土するからである。

竪穴建物は平面形が一辺約3mときわめて小型であるが、造り付けの竈がある。05C区SB2001では北壁に、05D区SB3001では東壁に約40㎝長の煙道のある竈が確認された。特に05D区SB3001の竈は基底部が「袖」として確認され、焚口から煙道の一部が焼けて赤変していた。また焚口底部には土師器甕底部を支える支脚（おそらく石）を据えた直径10㎝の円形穴があった。竈内からは土師器甕1個体分と灰釉陶器が出土した。

遺物で特徴的なのは、包含層中からであるが円面硯、緑釉陶器（器種不明）、墨書土器である。墨書土器は8世紀末～9世紀初頭の須恵器蓋外面に「新」と書かれたもので、地名もしくは人名と考えられる。これら特徴的な遺物は05C区北西部に集中しており、それぞれの所属時期も近いことから、セット関係にあったと考えられる。ただこのセット関係は仏具のそれとは異なり、官衙出土土器のセットに近い。当該期集落の中心的施設がこの付近に存在したと想定しておきたい。

昨年度は平安時代の土錘が一括廃棄された土坑が確認されたが、今年度も包含層中から多数の土錘の出土をみた。また、05C区では包含層中から鉄滓が多数出土したことも特記される。鉄滓はその形状から中世における小鍛冶の可能性が高いが、05C区竪穴建物SB2001の覆土中からも出土しており、平安時代にも行なわれていた可能性も考えておくべきだろう。

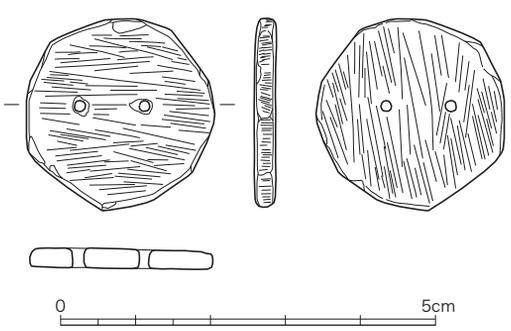


図２　双孔円板実測図（1:1）

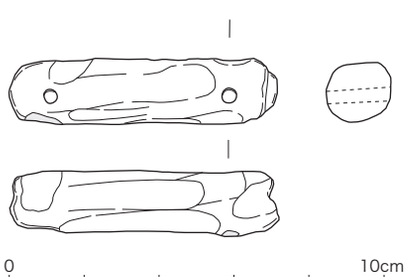


図３　土錘実測図（1:2）

希薄な鎌倉時代

11世紀代の灰釉陶器がみられるものの、12〜13世紀の灰釉系陶器は少なく、鎌倉時代の御山寺遺跡周辺は空閑地もしくは耕作地になっていたと考えられる。ただ遺跡南側を北西方向へのびる道は岩倉と一宮市町屋を結ぶ古い道であったと考えられ、13世紀代は05A区でみられた「旧五条川」の流路も機能していたとみられることから、渡河点としての何らかの施設も想定されよう。しかしながらそれに関わる遺構はなかった。

戦国時代の溝

御山寺遺跡の出土遺物の中でおそらく最大割合を占めると考えられるのが瀬戸美濃編年における古瀬戸後期段階から大窯1期の陶器である。これら陶器は全調査区を通じた包含層中から多数出土するが、大溝からの出土が最も多い。大溝は昨年度確認された途中に屈曲部をもつ概ね東西方向にのびるものの続きで、05A区ではそれが「旧五条川」が湿地化し埋没した後に掘削される南北大溝に合流。したがってここが西端となる。一方東端は未だ不明であるが、犬山街道から東方へのびることは確定的で、全長250m以上の規模になると推定される。ただ、線路から東側では幅約7mであるのに対し、線路から西側では幅約5m以下である点は注意しておきたい。04A区で確認された大溝屈曲部から南方へ大溝が分岐する可能性も考えられ、そうするといくつかの単位で掘削された大溝が結果的に連続した状態で検出されたということもありうる。また05B区では円礫主体の土砂によって意図的に埋め戻した痕跡がうかがえるが、線路東側ではそれが明瞭にはみえない。大溝の掘削から埋没過程については遺物の検討が欠かせず、今後の検討課題としたい。

なお、05C区では大溝に対して南北方向の小溝が数条合流する。これらが検出状況から東西大溝に先行するのはあきらかで、04B区での評価とおりこれらが屋敷地区画溝とするならば、もともとあった屋敷地区画溝を連続させるかたちで大溝が掘削されたことが想定される。その結果大溝は完全な直線にならなかったとも考えられる。ただいずれにせよ大溝開削に何らかの意図があったはずで、その歴史的意義を追求する作業が必要となる。御山寺遺跡は岩倉城と井上城との中間地点に位置し（図4）、これまでの中世〜戦国時代地域史研究からはややはずれた存在であったこともある。大溝出土の遺物は岩倉城が発展期にあった15世紀末〜16世紀前半のものであり、岩倉城下町の範囲にも関わる課題でもあることを示しておきたい。

図4　御山寺遺跡大溝と岩倉城跡の位置関係図
（1:25,000）

江戸時代の墓地

05B区では大溝が埋没した後に形成された墓地が確認した。長軸約1mの楕円形となる土坑は礫層上面まで掘り込まれて、被葬者は棺に入れられな

い状態で埋葬されていた。人骨や歯は9基の土坑から出土したが、風化が進んで形状を保って取り上げられたものはなかった（図5）。出土位置から横臥とされるものが複数あった。また歯だけが残存していた墓はその鑑定から子供とみられる。副葬品のあるものは2基にとどまり、そのうち1基からは寛永通宝6枚を六道銭として埋めたものもあった。他に人骨などの出土がなかあったものの形状から土坑墓と考えられるものが約15ある。また、土坑墓と関わりは不明ながら、長さ約2m幅約15㎝の壁面が焼けて赤変した土坑が3基確認された。土坑覆土からは焼けた骨片が出土しており、火葬施設と推測される。ただ火葬骨を埋葬した墓は確認できなかった。ちなみに05B区では墓石の出土はなく、付近一帯でも当該地点が墓地であった伝承はなかった。（永井邦仁）

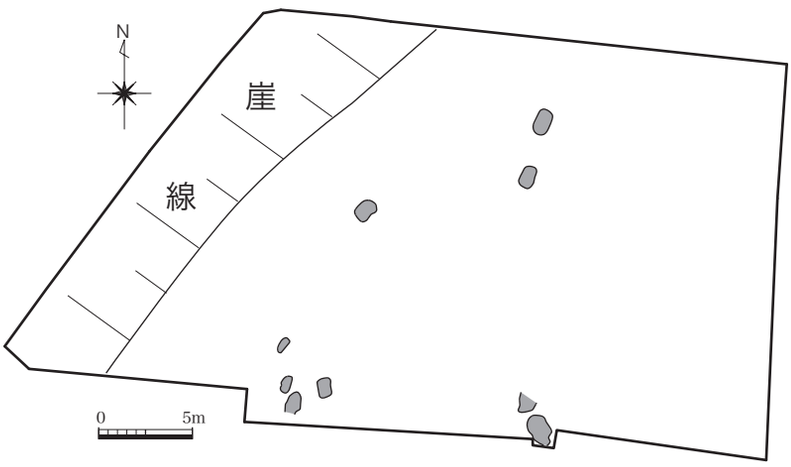
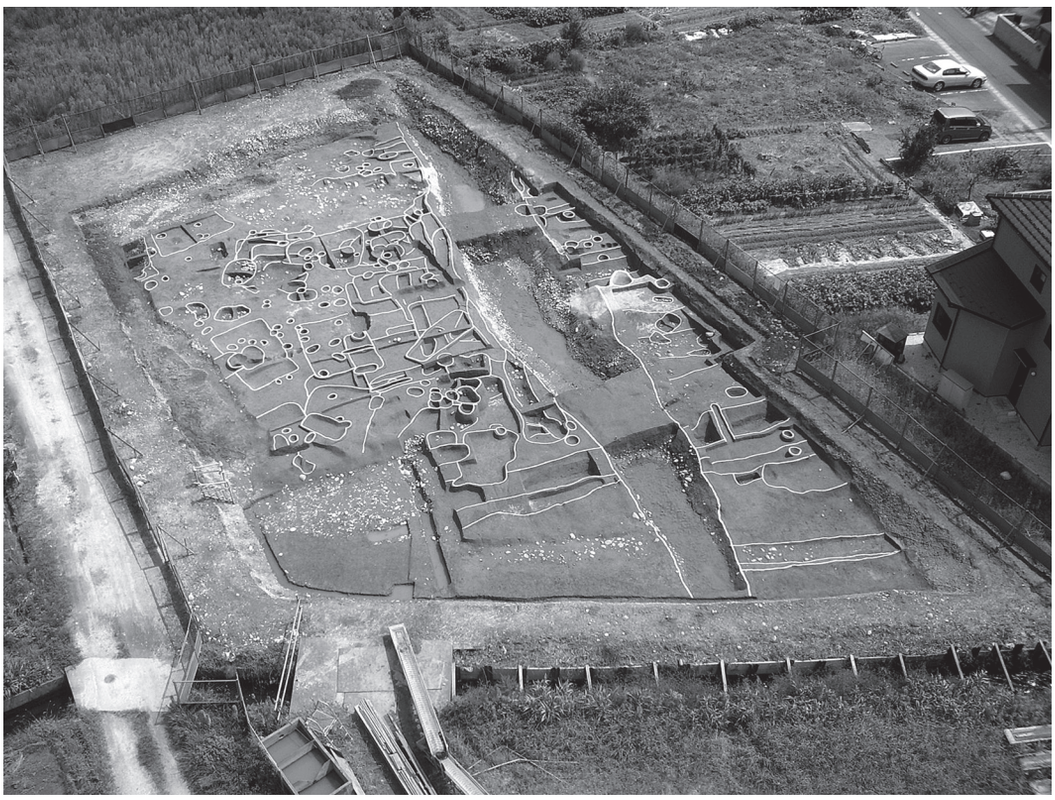


図5　05B区人骨出土墓配置図（1:200）

遺跡全景　西から（手前に05B区、線路東側に05C区、左奥は小牧山）



05B区全景　西から

05C区全景　東から